D−12 児童の生活構造の時代的変遷に関する研究（第2報）
（その3）食生活について

大妻女大家政　○八倉巻和子　前川當子

研究目的・方法については、その1で述べた。今回は、過疎地における幼児の食生活と健康の状態を統合的に調査した。食物摂取状況は聞きとり調査、身体状況は実測検診、聞きとり調査の方法をとった。その結果、幼児の健康と食生活、生活構造との関連等について研究したので報告する。

1) 体位・対象幼児の身長、体重を年令別、性別に分類し検討したところ、身長は標準値に達しているが、体重はこれを下廻っている。けれども、標準体重の範囲にランクする幼児は81.9％、それを下廻る幼児は16％であり、そう身型の幼児が6人に1人の割合である。2) 健康状態・現在健康である幼児は95.5％あり、過去に疾病のあった男児51.9％、女児37.5％である。授乳方法は、母乳が多く（42.2％）、離乳終了期が長いこと（1.8ヶ月）と両者について都市幼児と比べその相異がみられる。3) 食物摂取状況　イ)栄養摂取量は、栄養所要量に比べ各栄養素とも下廻り、とくにカルシウム、ビタミン類が不足している。ロ)食品摂取状況は、使用油脂、野菜、乳類の摂取が少なく、緑黄色野菜、牛乳の不足が著しい。ハ)嗜好傾向は、卵、ハム等を好み、チーズ・バター・魚等を嫌う。ニ)食事の配分比は、朝21％、昼28％、夕25％、間食26％となっている。このように間食の割合が多いのは、都市においても同様の傾向である。4) 間食・間食回数2.5回、規則的に与える51.7％、与え方も市販品62％、買い喰い14％と都市の幼児と異なるところである。5) 偏食・偏食する幼児31.3％（男19.3％、女12.0％）で性差がみられる。その他、母親の食生活意識について多少の知見を得た。